



卓 話



「23年目のイニシエーション・スピーチ四谷今昔」 井上 国治会員

今日は私が生まれ70年間暮らしてきた四谷の話をお話したいと思います。私の戸籍はまだ東京府東京市四谷区伝馬町となっています。四谷は四谷見附から、大木戸という関所のあった四谷4丁目までを指します。それから先は内藤家の所有する地所でした。その土地に甲州街道に通じる宿場をおこす為につくられたのが新宿です。しかし、今回は四谷見附から四谷4丁目までに区切らせてお話をさせていただきます。



四谷見附には大正2年、四谷見附橋が架けられました。明治時代に迎賓館ができ、それとの調和を図るように造られた為、大正ロマンの雰囲気を持つあか抜けた橋でした。四谷ロータリークラブのバナーのデザインにはこの橋が使われています。東京には面白い習慣があります。新しい橋が出来上がると3代の渡り初めといって、一家三代が最初に橋を渡ります。四谷見附橋が出来た時には、元会員の冨木さん一家が渡り初めをおやりになったそうです。現在この橋は移動され、昔の姿のまま多摩ニュータウンの方で実用的に利用されています。

現在架かっている橋は、昭和62年頃に新宿通りを拡幅するに当たり、今迄の橋よりも大きく造られました。四谷見附は橋を中心に左右に土手があります。右側にはありませんが、左側には石垣があります。その石垣は四谷御門といわれた見附番所が置かれていた跡です。ここから先は麴町となり昔は武家屋敷が連なっていました。私達は子供の頃、四谷見附の土手で、とりもちを使ってトンボやセミを捕ったり、また竹竿にミミズをつけてフナを釣ったりしてよく遊びました。私にとってこの少年期は人生の中で忘れられない一番花のある時代でした。

当時四谷は四谷見附から3丁目まで映画館が2軒、寄席が2軒あり、わりと文化的な地区でした。今の朝倉メガネ付近に四谷日活があり、杉大門の中に入った左に四谷キネマがありました。寄席は今のファミ

リーマート付近と、三菱東京UFJ銀行の左側にありました。

私の母は白金生まれで、母方の祖父は葉茶屋を営んでいましたが50過ぎに緑内障で全盲になり、京浜線の梅屋敷に隠居しました。祖父は漫才や落語を聞きに行くのが大好きで、映画も目がみえませんが音だけでも楽しめるのかよく足を運んでいました。私は祖父のステッキ代りとなってあちこち連れて行ってもらったものです。子供の頃には四谷に夜店が出ていました。古道具、古本、盆栽から寿司屋等の屋台が四谷見附から四谷3丁目まで続いていました。その夜店にお店の工員さんに連れて行ってもらったり、祖父の散歩がてらのお供をした事が、今でも忘れられない思い出です。

四谷で一番名前が知られている寺社は須賀神社ですが、四谷怪談のお岩稲荷も有名です。歌舞伎役者が四谷怪談を演じる前にお参りしないと悪いことが起こるといわれ、今でも上演する時は必ず役者はお参りに行くそうです。それから徳川家康に引き立てられた伊賀忍者、服部半蔵の墓のある西念寺もよく知られています。後年、半蔵は仏門に入って「西念」と号し、麴町清水谷に安養院を建立しました。後に、江戸城の壕の拡張工事に伴い四谷に移され、西念の号をとって「西念寺」と改められ、服部家の菩提寺になりました。

四谷は有名な三業地、料理屋、置屋、待合いのある地域で、四谷の荒木町は神楽坂と同じ位に栄えた花街でした。又6月に行われる祭りでは、最初に各町内の紋付きを着た役付きが、その次に鶯の頭が15人程で木遣りを歌いながら登場し、その後を20人程の芸者が旅装束で続きます。彼女達は丸い金属の輪が付いている杖をつきながら歩くのですが、いっせいに音を鳴らしながら歩く姿はとても調子がいいものでした。そしてその後ろに大人子供が叩いている大太鼓をのせた山車、須賀神社の大きな御神輿、さらに各町内の小さな御神輿が続き、交通が遮断されて行われる四谷のお祭りはたいそう派手なものでした。

私は昭和10年、第三小学校に入学しました。初めての遠足は清水谷公園でした。四谷見附から土手を右へ行き、紀尾井坂を下った所をホテルニューオータニ方向へ曲がると左手にあります。その公園は大久保利通が暗殺された事で有名です。

昭和16年に帝京商業中学に入りましたが、同年12

月4日に太平洋戦争が始まり、3年生から学徒動員として召集されました。動員先は亀戸にあった精工舎で、高射砲の部品を作る事になりました。昭和20年3月10日、東京大空襲があり、四谷から見ると下町の亀戸方面の夜空が真っ赤になっていました。私は作業着や靴を会社のロッカーに置いていたので、一緒に勤めていた学友と一緒に会社に取りに向かいました。もちろん電車など動いていませんから徒歩です。秋葉原付近を通りかかった所で、軍事物資の砂糖が焼けて真っ黒になっているものを皆で奪い合っているのに出くわし、私達も少しなめた記憶が残っています。防空頭巾に水をかけて歩いていましたが、道路の余りの熱さに、総武線の軌道を行く事に決めました。隅田川にたどり着いた時、何百何千という死人が流れている光景が広がっていましたが、既に死人を見る事に麻痺してしまっただけで、すごいなと思っただけであったのを覚えています。ですが土手につぶしている丸焦げの母親の死体と、その下から出ている子供の死体の2本の足を見た時、最後まで子供を守ろうとした母親の愛情はすごいものだと感じました。精工舎にたどり着き、そしてまた沢山の死体を見ながらなんとか無事に四谷に帰り着きました。

そしてとうとう4月25日には四谷を空襲が襲いました。飛行機が間近で空襲しているのを見ても実感がわかず、きれいだなあ等と思っていました。しかしそのうちものすごい音がして迎賓館の街路樹から火柱があがると、さすがに身の危険を感じました。本当に数秒の違いで死んでいた距離だったのです。そこにいた消防士に早く逃げろと声をかけられ、布団に水をかけて頭からかぶって逃げましたが、どちらに逃げたらいい

のかわからず、とりあえず四谷三丁目を左に曲がり左門町、信濃町の方面へ行き、結局外苑で一夜を明かしました。翌日疎開先の橋本まで歩いて行こうと荻窪まで行くと、幸運な事に電車が通っていたのでなんとか帰り着く事が出来ました。その後動員先が川越に変わる事となり、川越なので芋が沢山食べられると考えていたのですが、実際には食べるものといったら脱脂大豆の潰したものの、煮た芋の茎という状況でした。

ようやく終戦となり大学に入りました。卒業すると父の会社を継がずに、新宿にあったムーランルージュという劇場に、舞台監督助手兼研修生という形で雇われました。劇場には森繁久弥、三崎千恵子、楠トシエ、由利徹等が座付き役者として活躍しており、私も2年半程そこにおりましたが、結局劇場は倒産してしまいました。

その後私は物書きになりたかったので、広告代理店に入社しましたが、インテリア部に移動し、結局その仕事が生涯の仕事となったのです。

今年で79才になりました。実感としてはずいぶん長く生きたと思います。今の自分の中の根幹的なものには、子供の頃の楽しい時代、青年時代の食べ物のない苦しい時代、そして戦後の大変豊かな時代を経験してきた事があると思います。又子供の頃に祖父から言われた言葉を思い出します。「国坊、嘘をつくな、恥ずかしい事をするな、男は潔く生きるんだぞ。」私にそう言った祖父より10年以上長く生きていますが、今あらためて思い返してみると、祖父の言った通り出来てきたかは疑問です。しかし、今後ともそれを心がけながら生きていきたいと思っています。